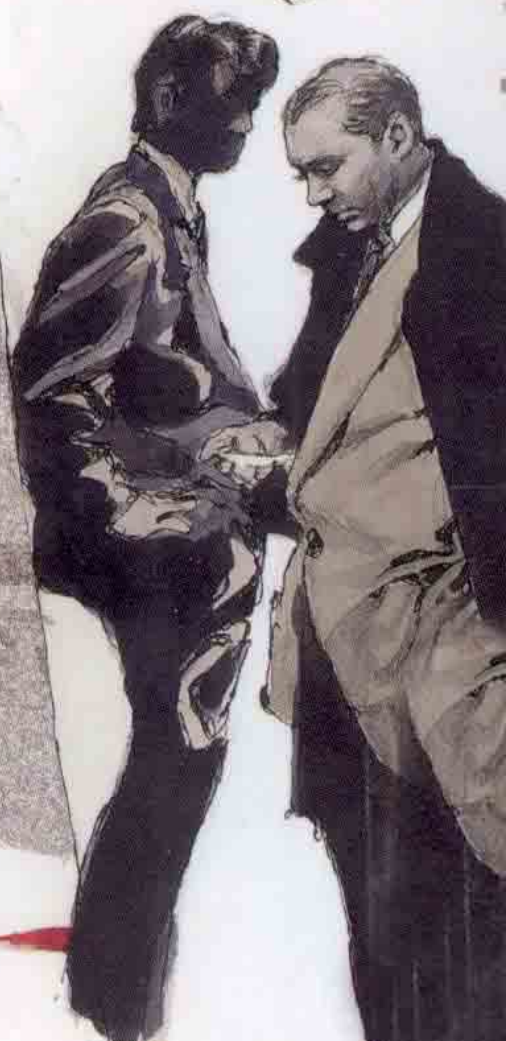


歪んだ空白

ひかり 44号	列車名	時刻表
1255	大原	入線
③	大原	発車
1305	大原	
1324	大原	
14	大原	
14	大原	

1254
1313
1340
1400
1200
1202
1257
1314
1250
1333
1310
1400
1420
1405
1425
1330
1106
1117
1126
1140
1144
1150
1212
1229
1255
1304
1306
1319
1338
1405
1310
1038
1100
1111
1126
1148
1150
1218
1238
1220
1222
1306
1319
1338
1405
1310



中公文庫

歪んだ空白

森村 誠一



中央公論社



中公文庫

ゆが くらはく
歪んだ空白

定価はカバーに表示してあります。

1997年5月3日印刷

1997年5月18日発行

著者 もりむらせいいち
森村誠一

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Seiichi Morimura

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202851-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

歪んだ空白

森村誠一



中央公論社

目次

歪んだ空白	7
殺人環状線	87
死海の廃船	149
被殺の錯誤	197
人間解体	255
祖母 ためじよ 為女の犯罪	333

歪^{ゆが}
んだ
空白

歪んだ空白

1

女から初めてそれを告げられた時、男は目の前が暗くなるような絶望感をおぼえた。これで何もかもだめになる。折角微笑^{ほほえ}みかけた運も、権力と地位への招待状も、ハイスサエティに至るエリート^{エリート}の資格もすべてが取り消される。

男は、その絶望をもたらしただ女の下腹を恐怖の目でみつめた。別にそこにはまだ徴候は認められないようだ。いつもと同じ妖^{あや}しいくびれと、たった今、男から思うさま貪^{むさぼ}られた桜色のぬめりを帯びたふくらみが、無限のたくましさと貪欲^{どんよく}さをもって、男を再度の導入に誘うように挑発的な曲線を描いている。

しかしそれを告げられた後の男には、いつものように二度目の欲望は湧^わいてこなかった。むしろそれを眺め、それに触れることが恐ろしくなってきた。

「墮^{おろ}してくれ！」

最初のショックからようやく立ち直った男は、女に頼んだ。

「おろす？」

女には最初その意味がわからなかったようである。

「何を言うの!? 私たちの最初の子供じゃないの。私、あなたが喜んで下さるものとはばかりおもっていたのに」

男の言葉の意味を正確に把^{つか}み取った女は、次の瞬間、悲鳴のような声をあげて男を詰^なった。

「そりゃもちろん嬉しいよ。嬉しいけど、まだぼくらは正式に結婚もしていない。結婚もしないうちに子供ができちゃったらまずいよ。君だってウチの社風はわかるだろ。もともと社員同士の恋愛に消極的なうえに、上役たちにふしだらな男と思われたら、おたがいの将来にとってもマイナスなんだ」

男は女をなだめすかすように言った。

「すぐに結婚式を挙げればわからないわ。結婚してしまった後に子供が産れるんだったら、少しぐらい早くても、何でもないわよ。ねえ、今日これからすぐに私の父や母に会って！」

「君はぼくのことをもう両親に話してしまったのか!」

男は唇まで白っぽくした。汗みどろだった二人の体は完全に乾いている。たった今、共通の目的のために激しく燃えた二つの軀からだは、骨まで冷えたように、冷え切っていた。「あなたがいけないって言うから、まだ話してないわよ。でもどうして話してはいけない?」

「まっ、待ってくれ。もう少し待ってくれ」

「あなた」

女は急に目を据えた。中高の小さな可愛らしい唇に、その形にそぐわないふてくされたような笑いが浮ぶ。

「私と結婚する気なんか最初からなかったんでしょ。私、知ってるのよ」

「知ってるって、何を?」

男の口調に狼狽ろうばいがあった。

「隠してもだめ。藤本専務のお嬢さんとあなたとの間に縁談があるっていうことよ。

東京本社ですら知られていない情報も、女には早く入るものなのよ。特にあなたに関するニュースは、誰よりも早く入るようにしているわ」

「そ、そんなことまだはつきり決ったわけじゃない」

男の狼狽を強めた言いわけがましい口調が、女の言葉の正しいことを裏書きしていた。

「あなたは私が邪魔になったのね。次期社長最有力候補の藤本専務の娘と結婚すれば、末の出世は目に見えている。支社の貧しいタイピストなどは、それこそ月とすっぽんだわ。だから私と、お胎^{なか}の子供が居ては都合が悪いのよ。でもそんな勝手はさせないわよ。あなた、私の体を初めて求めた時、何と言ったか覚えてる？ 忘れてるんだったら、思い出させなければしょうか。きみはぼくにとってただひとりの女性だ、人間は誰でもこの世に生れた時にただひとりの異性をもっている、しかしたいいていの人間はそのような人にめぐり逢えないまま、ナンバーツーや、ナンバースリーの相手にがまんしてしまふ、でもきみはぼくにとってただひとりの女性だ、ベストの女性だ……」

「たのむ、止めてくれ！」

「止めないわ。あなたはそれを自分の都合からあっさりと取り消してしまった。私ひとりのことだったら、それも許したかもしれない。でも生れてくる子供は、あなたの

都合に関係ないわ。子供の命は親の都合、それもごく手前勝手な都合だけで処理できるもんじゃないわよ。私が絶対にそんなことはさせないわ。私を捨てたければ捨ててもけっこう。でも私は子供を産むわ。誰の子でもない、正真正銘のあなたの子供を産んで、私が育てて上げる。もの心つくようになったら、お前の父親は、自分の出世のために、お前がまだお胎の中に居たころ殺そうとした冷酷な男なのよと教えてやるわ」

女は憎悪にみちた目で男を見た。それはうちに圧縮された憎悪が、目に出口を見つけて迸り出てくるように、白い炎を噴き上げていた。

窓外にはようやく夜の更けた大都会が七彩の光を砕いている。巨大ホテルの厚い防壁によって、プライバシーを保証された密室の中で、一組の男女は、たがいの体を組み合わせるのに絶好の姿勢と状態にありながら、激しく憎み合っていたのである。

2

新大阪駅4番線新幹線到着ホームで若い女性の刺殺体が駅員によって発見されたの

は、三月二十九日の午後一時半ごろである。折りしも到着したばかりのひかり27号の乗客が三々五々と散って行った後の、ホームのはずれにある一人掛けのベンチにうずくまっていたまま、いつまでたっても動かない若い女性が居るのに気がついた駅員は、乗客の一人が気分が悪くなったのかと思って声をかけた。

しかし返事はかえってこなかった。

「もしもし……」

声を大きくしかけた駅員の目は、彼女の足もとにどろんとかたまっているかなりの量の赤黒い粘液にふと吸いつけられた。愕然^{がくぜん}としてあげた彼の目は、粘液が滴下したあとを溯^{さかのぼ}る形になって、その源になっている胸のあたりに釘^{くぎ}づけになった。

「こ、ここに」

変死体を初めて目撃、発見した彼は、殺されていると言ったつもりが、言葉にならずに、上司や同僚のつめている駅の事務室の方へ一目散に走った。

*

死者の身もとはハンドバッグの中にあつた通勤定期券から、西宮市甲子園口二の二